

まんたら通信

第144号 (通巻176号)

平成20年(2008)06月 佛誕2574年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍涉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
URL <http://www.awa.or.jp/home/ryusho/>
E-mail ryusho@awa.or.jp



娑婆に暮す

ご存知、長尾川にかかる眼鏡橋は、今から百二十年前の明治二十一年に竣工したそうです。

日清戦争の数年前ですね。今、千葉県の有形文化財でもあり、『房総の魅力500選』にも登場します。

『長尾村史』などを調べればもっと詳しいことが分かるでしょうが、一般村民の寄付金で賄われた総額は、三百九十九円四十銭だったそうです。

幅四メートル長さ二十メートル、洋式三重で石組みのこの橋を、大東亜戦争中に戦車が通ったりして少し痛みましたが、十年ほど前補修工事をして立派に蘇りました。

明治五年、政府は公教育の制度を作りました。このときも、入れ物である学校はみんなの寄付で作ったそうです。

この地区では最初は、今は紫雲寺と合併した西福院がそれだったそうですから、それまでの寺子屋を流用したのでしょうか、すぐに現在の長尾橋近くに新設しました。

もとの根本村や白浜村・乙浜村も同じことだったろうと思います。

これらが、今の金額でどれくらいかはわかりませんが、その日暮らしの村民にすれば、相当に大きな額だったろうとは思いますが。

橋や学校などは公共の施設ですから、今ならみんなが必要と思っても、お上が予算をつけなければ出来ないのだと、みんなが思っています。

何故、その頃は自前ですんなりと出来たのでしょうか。

それは徳川幕府のやり方を、みんなが身に付けていたからだ、私は思っています。

つまり、自分たちのことは自分たちでするということ、今風にいうと『地方自治』の心ですね。

余談です。

小説やドラマで、生かさず殺さずでちぢちぢ返っている百姓・町人と、権力を笠にきてふんぞり返っているお侍や殿様が出てきますが、これは間違いだそうです。

もしそうだとすれば、この幕府が二百六十年余り、武力も使わずに続く筈がありません。事実この間、明治維新に至るまで内戦はありません。多分世界でもこんな国は他になかったのではないのでしょうか。

端的に言えば、決まり事さえ守っていれば、身分にかかわらず、安心して暮らすことが出来る国だった、ということですね。

松尾芭蕉の奥の細道に、借りた馬を返すときに、馬の背中に借り賃をくりつけて帰したという、ウソのような話があるそうです。馬が一匹で駄賃を背負って飼い主の許に帰るなど、この国の治安が如何に勝れていたかという証拠です。

明治の始めに東京から北海道まで旅をしたイギリス女性、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』にも、住民の物見高さとノミと蚊に悩まされながらの旅の様子が描かれています。日本人の、約束事を守る心、生き物を慈しむ心(四つ足を食べるのは苦手、という人多かったですね)、相手を思いやることなどについて、繰り返し絶賛しています。

世界でも稀な美しい心の人たちであると。今でもその心は伝わっていて、例えば道ばたの自動販売機。

番人がいないお金は盗られてしまう、というのは世界の常識だそうで、ヨーロッパなどでは店の中にしかないのだそうです。本題です。

私たちが住んでいるこの世界は、娑婆世界といえます。

『シャバ』はインドの古い用語、サンズクリットの『サハー』の音訳で、漢訳では忍土といえます。つまりお互い我が儘は引つ込めあいながら暮らす、ということでしょうか。

困ったことに、戦後の教育は個性や権利ということを教え過ぎ、義務とか自己規制つまり我が儘を引つ込めることを教えたかったため、他人様の迷惑になるとはどういうことか、分からない人が増えてしまいました。

ほんの一例ですが、今話題の『後期高齢者医療制度』です。

二年前に国会で決まっていたことを、今年の四月から実施したわけですが、「年寄りを切り捨てるのか」とか「姨捨山」とか評判が宜しくない法律です。

一つの家庭で、今までは何人もの子供がいたけれど、だんだん少なくなってきた。少ない出費でやりくりせず、今まで通りの暮らし方をすれば借金をしなければなりません。そのツケは子や孫の代に払うことになります。国も同じことですね。

今日現在、日本人一人当りの国債残高、つまり借金の総額は一千八百三兆円余り、つまり生まれたばかりの赤子も含めて、一人当たり何と八百五十万円です。

破産した、北海道夕張市の病院に赴任したお医者さんが言っています。これは行政だけの責任ではなく、あれもこれもと我が儘を言い続けた市民に責任があると。

このままが仮を続けば、日本中の町が同じになりますとも。

病気になるように気をつけなければ、医療費の赤字は間違いなく減るのですから。

『太陽の里』(長生郡長生村一松3445)へ行ってきました。

露天温泉や砂風呂など入浴施設が揃って、地方公演の股旅演劇あり、踊りありで昼食付きの上送迎バスで5,000円は、随分とお手ごろの楽しみと感心しました。

知らなかったのは私だけかも知れませんが、計画や手配などして下さった役員の皆さん、同行の皆さん有難うございました。

運転手さんが「私のところはまだ村なんです」と恥ずかしそうに言っていました。行政区域は小さい方がいいのです。大きくなるほど、目配りが利かなくなりますから。



◆今年も半分目に入りました。鬱陶しい梅雨で、わが家のミツバチ達も、雨の合間にせせせと蜜集めをしています。

一日に何回か、巣箱の横にしゃがんで出入りを暫く眺めるのですが、その働きぶりを真似たいと思ってしまう。

初めての人は、そんなに近くで大丈夫ですかといいますが、日本に元々住んでいるミツバチは、おとなしいので滅多に刺さないのだそうです。巣箱を開けて覗いても、迷惑がれますが大丈夫です。

今、二ホンミツバチを飼う人が増えているようで、ネット上には数多くの記事があります。

私も『ミツバチ日記』を、時々書いていますので、興味のある方は見て下さると有り難いです。

紫雲寺のホームページから行けます。◆今月の野草はヒルガオ【ひるがお科ヒルガオ属】です。館山バイパスの終点近くの道ばたに、今ごろの季節になると毎年咲きます。明るく淡い色の花が少ない季節のせいか、目に留まりやすい野草ですね。花の終わったナガミヒナゲシに絡みついています。何故か、小林一茶のとうふやが来る屋敷が咲きにけりという俳句を思い出します。◆

先日、地区の老人クラブの皆さんに連れられて、九十九里海岸の

余滴

付け足しのようない

『まんだら通信』を書き終わっていつも思うのは、もつと言いたいことがあるのに紙面が足りなくなつて、結論が良く分からずに終わってしまうことです。

人には時期というものがあつて、勉強する時には一生懸命しておかなければならなかつたと、一日で言えば日が西の山に隠れようとする年頃になつて後悔するばかりです。

『お経』と私たちがいうのは、一般には「如是我聞」つまり、「私はこのように聞きました」で始まり、靈鷲山とか祇園精舎など場所を挙げ、そこには聞き手が、例えば大迦葉尊者他大勢がおりましたという説明があつて、初めて本題に入ります。

この「私」は阿難尊者のことですが、阿難尊者はお釈迦さまの侍者としていつも身近におられ、お釈迦さまのお話を沢山聞くことが出来たので、多聞第一とよばれお釈迦さまがお涅槃に入られてすぐの、最初の結集つまり編集会議の時、みんなに推されて責任者になつたからです。

因にその頃、インドには文字が既にありましたが、聖典は文字に表さず言葉だけで伝えました。

文字になつたのは、それから数百年後のアショーカ王の時代だそうです。

この口伝えの伝統があるスリランカのお坊さんの暗唱力は、日本人には想

像出来ないほど見事なものです。

長いお経の真ん中からでも終りからでも、すらすらとお唱え出来ます。

演歌のような短いものでも、二行目から歌えと言われて即座に出来る人は、余りいないのではないのでしょうか。

前置きが長くなりました。

お経は、このように一般には聞き手がありますが、そうでないものもあります。

誰に言うわけでもなく、独り言のように仰つたお言葉を集めたお経です。その一つ『法句経』に「次のようない句があります。

一切の悪をなさず
善を行ひ
自己の心を浄む

これ諸仏の教えなり

これは『七佛通戒偈』といわれる有名な一語ですが、なんだ、仏教ってそんな当たり前のことを言ってるのかといわれそうです。

昔、中国の王様が、達磨大師が自分の国に来て大層な評判であるという話を聞き、出向いて行って「仏教とはどういふ教えなのか」と尋ねたそうです。達磨さまは「悪いことはするなといふ教えです。」と答えたなら「なんだ、三つ子でも分かることを大層な」とがっかりしたところ「あなたはそれが出来るのですか。」といわれて返答に困つたという話があります。

このお経も、悪いこととは何か、善

いこととは何かがつかり分からないと、話が進みませんね。

観音さまのように、いつも穏やかなお顔だけが善ならば、お不動様の怖いお姿の意味が分かりません。

困っている人にお金を呉れれば、その人が幸せになるかどうか、実際のところは分かりません。

東京の下町で、献身活動をしている神父さんがいらつしやるそうです。

それに賛同して、食べ物や衣類が全国から送られてきます。

冬の夜はさぞ寒かろうと毛布を渡すと、それがすぐにアルコールに化けてしまふ人もいるのだそうです。

親切も根気が要ることなのですね。

『七佛通戒偈』はほんの一例ですが、お釈迦さまを始め古来の多くの名僧達が口を酸っぱくして「良いことをしなさいよ」といつたのは、お金や地位などより、自分が遥かに幸せになれるのが「善行」つまり本当の意味で人を喜ばせることなのだよ、ということなのですね。

そして、自分が多少の犠牲を払つても他人を幸せにするそのことが実は、この世に生まれて最高の幸福なんですよ、ということですね。

思つても実行しなければ絵に描いた餅です、と言う人もいます。

然し、思わなければもつとダメですよ。ね。

要は、忘れずに繰り返し思い出し、確かめることでしょうね。

こういうとき基準になるのが、仏様はどうお思いかと想像することも大事

です。

つまり、仏様の前に座り仏様という鏡に自分を写してみることにいえます。

もう一つの方法があります。

おととい、那古寺さんで安房の若いお坊さんの主催で、チベットの仏教やチベットと中国のかかわり合いを勉強する機会がありました。

講師の田崎国彦先生のお話は、学者先生にありがちな分りにくい話し方ではなく、実に丁寧で良く分かる話し方で、随分得をした思いで帰つてきました。

中でも強く印象に残つたことは、チベットの人たちは輪廻転生（人は何回も生まれ変わるといふこと）を固く信じているのですが、「総ての生き物は、嘗て私の母だつた」といふ思いから修行を始めるのだそうです。

ロンドンという方法だそうです。段階を積んで仏の心、慈悲を身に付ける修行のことなのですが、その中に「自分と他人を入れ替える」修行があつて、「こういうとき、若し私が相手の立場だつたとしたら」、という考え方が自然に出来るようになれば、私も周りも随分穏やかになるだろうなと思ひました。

また例によつて、尻切れトンボの話になつてしまいました。